

トピックス

第9回国際肥満学会議(ブラジル)に参加して

名古屋大学総合保健体育科学センター

佐藤 祐造

第9回国際肥満学会議 会頭:サンパウロ大学医学部内科甲状腺分野Geraldo Medeiros-Neto教授, 組織委員長:サンパウロ大学医学部内科肥満分野Alfredo Halpern教授が今年(2002年)8月24~29日まで, サンパウロで開催された。私はMini-Symposium“ The metabolic syndrome”のco-chairmanの機会を得, 同学会に参加したので, 主要プログラムを紹介するとともに, 簡単に印象を記したい。

学会の主要プログラムはサンパウロ郊外のExpo-Center, Alfa Theater, Transamerica Hotelで行われたが, 会場間の移動に少々時間を要したとはいえ, 全般的にはwell-organizedに運営されたといえよう。

また, 全体の参加者約4,000名のうち, わが国からは松澤佑次理事長がMeet the Professorで“ Importance of adipocytokines in obesity related diseases”を講演されたのをはじめ, 井上修二常務理事, 永井克也常務理事, 池田義雄理事, 南條輝志男評議員, 朝山光太郎評議員など, 合計約50名が参加し, 座長や口演, ポスター発表者などを務められた。ことに, 大村 裕名誉教授御自身が“ Essential role of leptin in spatial learning and memory”というポスター発表を行われたのには, 大変感銘を受けた次第である。加えて, 高橋和男先生(千葉大細胞治療学), 西 理宏先生(和歌山医大一

内), 山本裕之先生(静岡大保健管理センター), 富樫健二先生(三重大教育), 田中茂穂先生(国立健康栄養研)など, 私が気付いただけでも数多くの“若手”研究者が口頭発表(なかには座長も)の演者となっておられ, 頼もしく感じられた。

今回のAndré Mayer賞はDB, Allison教授(Department of Biostatistics, University of Alabama at Birmingham, USA)が受賞した。タイトルは“Obesity research from genome to population: An integrative view”である。受賞講演で彼は, 肥満に関連した動物実験的研究, 食文化, 環境, 疫学, 分子生物学, 遺伝疫学, 臨床的研究, 経済学, 社会的精神医学など数多くの領域を超えた情報の学際的集約の重要性について言及した。

L.Sjöström教授(Department of Body Composition and Metabolism, Sahlgren University Hospital, Göteborg, Sweden)は“Intervenire necesse est”と題したWillendorf賞受賞講演で, Swedish Obese Subjects(SOS): surgical intervention study, XNDOS: Xenical in the prevention of diabetes in obese subjects, TOP33: weight loss study using topiramate in untreated type-2 diabeticsというスウェーデンで行っている3つのメガトライアルの進行状況について報告した。彼は全国的規模の研究の連絡やデー

タ集約には, マスメディアやインターネットを活用すべきであることを強調した。

Wertheimer賞はD.Ricquire博士(Centre National de la Recherche Scientifique 主任研究者, Meudon, France)が“Uncoupling proteins”というタイトルで受賞した。彼はUCP研究の現状についてレビューを行い, UCPが脂質の酸化と貯蔵の調節を行っている。UCPの機能低下が肥満を招き, UCPを薬物により活性化させれば, 脂質酸化が促進され減量も可能であることから, UCPの抗肥満薬としての可能性を指摘した。また, ヒトではUCP2, UCP3が基礎代謝や体脂肪量(体重)の調節を行っていることについて言及した。

これらはExpo-Centerという広い会場で行われ, 音響効果は必ずしも良好ではなかったが, 英語に関して, native speakerではない後二者のレクチャーについては, poor speakerの私にも何とか理解可能であった。

New investigator awardは下記の5名に授与された。

- (1) Dr.D.Clegg PhD(University of Cincinnati, USA): Differential regulation of food intake and body weight by male and female rats.
- (2) Dr.A Del Parigi MD(NIH, USA): Neural markers of increased risk of



図 Mini-Symposium “The metabolic syndrome”の司会を務めた

obesity in humans.

(3) Dr.J.Tian MD, PhD(Wayne State University, USA): The adiposity promoting human adenovirus alters the expression of genes of differentiation cascade of 3T3-L1 preadipocytes.

(4) Dr.YS Lee MRCPCH(National University of Singapore): Mutations of the melanocortin-3 receptor and melanocortin-4 receptor genes associated with obesity in humans.

(5) Dr.C.Stocker PhD(The Clore Laboratory, University of Buckingham, UK): Maternal leptin administration prevents obesity and insulin resistance associated with low birth-weight.

サンパウロ(ブラジル)は、日本から地球の裏側にあたり、飛行時間も24時間を必要とする距離的に極めて遠い場所である。したがって、日本人参加者数も約50名とこれまでの国際肥満学会に比べて少なかったが、先に述べたように、松澤理事長のMeet the Professorをはじめ、日本人は「存在感」のある役割を果たしたと思われる。

私はMini Symposium “ The metabolic syndrome ”の司会を行ったが

(図), “ syndrome X ”, “ deadly quartet ”, “ 内臓脂肪症候群 ”, “ マルチプルリスクファクター症候群 ”などとわが国で呼称されているこの病態について、今回の学会では、“ metabolic syndrome ”として、随所で研究発表が行われていた。また、私の研究室からはブラジルからの留学生の大学院生 G.Bajotto君がOLETFラットの筋PDH活性について口頭発表を行った。さらに、私自身も日本の国立大学学生460,269名の肥満と高血圧に関する集計成績(健康白書2000)をポスター発表した。

なお、受賞講演、シンポジウム、一般演題(口頭、ポスター)を含め、総アブストラクト数は868題であった。

ブラジルに行く前には、旅行案内などで「非常に危険な国」で「昼間に路上を歩く時は、腕時計をはめてはいけない」、「カメラは高級品は盗まれるので、レンズ付フィルムにする」等々、非常に恐ろしい国であるという印象であった。事実、今回の学会の参加者のなかでも某高級ホテル宿泊者の米国人(?)が「引ったくり」にあったとも伺った。私はたまたま所属しているロータリークラブの関係のブラジル在住の

知人に空港からホテルまでの送迎を依頼し、また、学会のシャトルバス以外のサンパウロ市内の移動には、たまたま出会った馬渡氏という日系人運転手のタクシーを利用した(池田義雄先生にも紹介した)。海外で随一という日本人街(正式には東洋人街)も散策し、日系新聞も購入したが、昭和初期の「古き良き時代」を思い出させるものがあった。

ブラジルの経済状態が深刻な状況にあるとの報道もなされているが、ブラジル人は早朝より勤勉に働き、活気のある市街という印象を受けた。

行く前には気の重かった国際肥満学会議出席も現在では楽しい思い出となっている。イグアスの滝の見物やシュラスコ(焼肉)、カイピリーニャ(カクテル)などをもう一度味わうため、ブラジルで私の研究分野に関係する国際会議がなるべく早い時期に開催されないか心待ちにしているところである。

なお、日本肥満学会では若手研究者(35歳以下)の国際肥満学会演題受理者に対し、トラベルグラントを設定している。

次回(オーストラリア)では多数のご応募を期待していることを申し添える。